

今泉 蓮

或冬晴れの朝、吾は早起きをしてハイキング・コースの展望台で一列の山脈を眺めていた。山脈は勿論（もちろん）まっ白だった。が、それは雪と言うよりも光輝く白に近い色をしていた。吾はこういう山脈を見ながら、ふと昔のことを思い出した。――

もう四五十年以前になった。やはり或冬曇りの朝、吾は或友だちと糸魚川線の駅の待合室で列車を待っていた。――見すばらしい鑄（い）もののストーブの前で地元の年寄りがその仲間と話していた。待合室には古ぼけたポスターの他に何も装飾になるものはなかった。煙草を吸う待合室の客も、――彼は成程（なるほど）鉄道保線員の持つ一種のたくましさを残していた。しかしどう言う量見か、天然自然に顔一面覆った白髯を剃らずに生やしていた。……話はいつかその頃の寒気の厳しさに移っていた。彼は如何に線路の除雪が大変かと言うことを話した。就中（なかんづく）雪崩で立ち往生した列車を如何に復旧するかと言うことを話した。「つまり雪は無限と言う感じだね。」

彼は煙草の煙を吐き、我々の顔を眺めまわしながら、スキー客は気楽だねと言っている顔をしていた。吾は何（なん）ともきまりの悪い気持で缶珈琲（カンコーヒー）を啜（すす）っていた。けれどもそれは地元のお年寄りに何か伝わったらしかった。彼はバッグを擡（もた）げ、彼の吐いた煙の輪にじっと目を注（そそ）いでいた。それからやはり空中を見たまま、誰にともしにこんなことを言った。――「列車の遅れはスキー客も迷惑だね。私もこの仕事を辞めてから、すっかり歳を取ってしまった。……」

或冬曇りの朝、吾は糸魚川線の列車の窓に迫る一列の雪の壁を眺めていた。雪の壁は勿論まっ白だった。が、こう言う雪の壁を見ながら、ふとあの年寄りを思い出した、あの顔一面覆った白髯の、歳を取っても逞しい元鉄道保線員のお年寄りを。

1月17日、JR東日本の新幹線が全線で1時間ストップした。原因は寒さで新白河駅と福島駅のポイントが故障し、そのためにダイヤ修正したところ派生的に運行管理システム「COSMOS」の処理容量が限界を超えたとのことことであった。

昔の在来線の運行管理であれば、その区間を管理するダイヤの名人が手でひょいひょいと線を引くだけで、解決したかもしれない。

しかし、現在は、東京の運行本部にあるシステムで一括してダイヤの管理を行なっている。そのシステムが予期せぬ動きをした。JR東日本は今後「徹底して原因究明、内容、再発防止策の検証、プログラム改修を行い、国民の経済活動や日常生活上迷惑をかけることのないよう」検討するとのことである。



<参照>芥川龍之介「雪」